

事前に次時の学習内容に触れることが 学習意欲の向上に及ぼす影響

学籍番号	249209
氏 名	品田 真那瑛
主指導教員	四辻 伸吾
副指導教員	瀧野 揚三

1. 背景

近年、日本の学校教育において、児童の学習意欲の低下は重要な課題として指摘されている。全国学力・学習状況調査においても、学力の定着のみならず、学習への取り組み方や意欲・態度に課題を抱える児童の存在が示されており、「学びに向かう力」の育成が求められている。特に算数科は、学習内容が系統的に積み重なり、抽象度が高まる教科であるため、つまづきが生じやすく、「分からない」「できない」といった否定的な自己認識が学習意欲の低下につながりやすい。

学習意欲は児童の内面的特性として固定的に存在するものではなく、学習環境や授業構成、教師の関わり方によって形成・変容するものである。先行研究では、自己効力感や有能感といった心理的要因が学習意欲を支える重要な要素であることが示されており、学習の見通しをもつことが学習行動の開始や持続を促すとされている。

こうした中、授業前に学習内容に触れ、考える機会をもつ「予習」は、学習への心理的準備や見通しを形成する手立てとして注目されている。しかし、算数科において予習と学習意欲との関連を実践的・継続的に検討した研究は十分とはいええず、特に「どのような予習課題を、どのように設定・運用するか」という点については未解明な部分が多い。

2. 研究の概要

2.1 目的

本研究の目的は、小学校算数科の授業において予習を導入し、その実践が児童の学習意欲にどのような影響を与えるのかを明らかにすることである。特に、学習意欲を「挑戦」と「達成」の2観点から捉え、予習の継続的な実施が、児童の学習への向き合い方にどのような変化をもたらすのかを検討する。また、ICTを活用した予習課題の設定と授業内での扱い方に着目し、算数科における効果的な予習導入の在り方について実践的に明らかにする。

2.2 方法

研究対象は小学校第4学年1学級とし、算数科の単元学習において予習を取り入れた授業実践を行った。予習は、授業内容の先取りを目的とするのではなく、問題場面に触れ、自分なりに考えや疑問をもつことを重視した課題として設定した。予習課題は授業支援クラウドを用いて提示・回収し、授業内では児童の予習時の考えを取り上げながら学習を進めた。

学習意欲については、「挑戦」と「達成」の2観点からなる質問紙を用い、実践前・実践中・実践後の計3回測定した。得られたデータについて分散分析を行い、学習意欲の変化を量的に検討した。また、予習に対する児童の意識を把握するため、実践後にアンケート調査を実施した。

2.3 結果

分析の結果、「挑戦」「達成」のいずれにおいても平均値は第2回調査で一時的に低下したものの、第3回調査において上昇がみられた。分散分析の結果、統計的に有意な差には至らなかったが、「達成」においては第3回調査で最も高い平均値を示し、実践の継続に伴う変化の傾向が確認された。

また、予習に関するアンケートでは、「予習をすると授業がわかりやすくなる」「内容を知っておくと安心できる」と回答した児童が多く、予習によって授業への見通しが形成されていたことが示唆された。

3. 考察

3.1 成果と課題

本研究の成果として第一に挙げられるのは、算数科の授業に予習を導入することで、児童の学習意欲、特に「達成」の側面において肯定的な変化の傾向がみられた点である。統計的に有意差には至らなかったものの、第3回調査において「達成」の平均値が最も高くなったことは、予習の継続が「分かった」「できた」という感覚の形成を支えた可能性を示している。これは、予習によって授業内容への見通しがもたれ、授業中の理解や参加が促されたためであると考えられる。

また、予習に関するアンケート結果から、多くの児童が「予習をすると授業がわかりやすくなる」「安心して授業に臨める」と感じていたことが明らかになった。算数科は正誤が明確で失敗経験が意欲低下につながりやすい教科であるが、事前に考えをもつことで、授業中の活動に主体的に参加しやすくなったと考えられる。

さらに、「挑戦」と「達成」で異なる変化がみられたことから、学習意欲は多面的な概念であり、各側面に応じた支援の必要性が示唆された。一方で、本研究は対象が1学級に限られ、実践期間も限定的であった。また、量的データを中心とした分析にとどまり、児童の発言や自由記述など質的側面の検討が十分でなかった点は課題である。

3.2 今後の展望

今後は、対象学級数や学年を拡大し、異なる学力層においても実践を行うことで、予習が学習意欲に与える影響をより多面的に検討する必要がある。また、実践期間を長期化し、学習意欲の変化を継続的に捉えることで、予習の効果の持続性を明らかにすることが求められる。

加えて、予習課題の内容や提示方法の違いが学習意欲に与える影響についても検討したい。本研究では「考えをもつこと」を重視したが、課題の難易度やICTの活用方法によって、児童の取り組み方は変化すると考えられる。

さらに、予習を算数科に限定せず、他教科へ応用する可能性についても検討したい。予習を「先取り学習」ではなく「学習への心理的準備や思考の入口」として位置づける視点は、他教科においても有効であり、児童が主体的に学習へ向かう姿勢を育む授業づくりにつながると考えられる。